

願掛け・参詣・遍路（巡礼）

内 田 九州男

はじめに ― 報告のねらい ―

日本の遍路あるいは巡礼と世界の巡礼の比較研究のために、その共通点を探る手がかりを得たい、これが本報告を準備した一番の動機である。

ヨーロッパの巡礼の場合、「奇跡」が起こることがよく知られている。たとえば、『聖遺物の世界 ― 中世ヨーロッパの心象風景』（青山吉信著）では、次のように整理されている。

中世人は、生活万般、実にさまざまな願いの達成を聖人に托した。奇跡は願いに心じて発現したから当然のこと社会生活のあらゆる局面にわたった。大別して以下列挙のごとくであろう。(1)治癒、蘇生（肉体的・精神的、家畜や鳥獣をも含む）。人びとが直面する最も切実な願いは、死、飢餓、疾病、怪我など生命の危機や困難からの脱却だったから、これらが大多数を占めたのは当然である。(2)外的な危険や災害（天災、火災、凶作、戦争）の回避とそれからの保護。火や嵐を鎮めるのは、聖人に共通の資質だった。(3)願望の達成（安産、豊作、家畜の多産、恋の成就、失せもの盗品の発見など）。(4)予知、予言。千里眼は型人すべての能力。(5)神・聖人の敵や侮蔑者への懲罰と復讐。(6)その他物質の変化（水→ブドウ酒・ミルク、自然点燈・消燈）等々。

日本の遍路や巡礼でこの「奇跡」と対応するのは、「靈驗」・「御利益」・「功德」といわれているものではないだろうか。こうした問題意識のもと、この「靈驗」・「御利益」・「功德」の内容やその発現のあり方を追及するのが、この報告のねらいである。そしてこのことは、人々が遍路（巡礼）に出た動機や目的を考えることにもなろう。尚本報告では江戸時代を対象にする。

先行研究は、意外と少なく、真野俊和「四国遍路靈驗譚」（『瀬戸内海地域の宗教と文化』）がある程度である。真野は現代の靈驗を追及しており、参考になる。

1 用語、「靈驗」、「御利益」（「利益」）、「功德」の理解

「靈驗」・「御利益」・「功德」といった用語にどんな意味があるのか、以下『広辞苑』（第四版）を参照しておきたい。以下に〔仏〕と有るのは仏教分野の学術語・専門語を示している。

○れいげん【靈驗】（レイケンとも）①神仏などの通力にあらわれる不思議な驗（しるし）。祈願に対する靈妙な効驗。利益（りやく）。利生（りしょう）。②靈驗所の略。＜参考＞通力【〔仏〕自由自在の超人間的で不思議な力。神通力。

○りやく【利益】1〔仏〕①ためになること。法力によって恩恵を与えること。白らを益するを功德（くどく）、他を益するを利益という。②神仏の力によって授かる利福。利生（りしょう）「ごー」

○くどく【功德】〔仏〕①よい果報をもたらすもとなる善行。「一を積む」「一を施す」②善行の結果として与えられる神仏のめぐみ。ごりやく。「一がある」

以上を参考にすると、靈驗は神仏などの通力にあらわれる不思議な驗（しるし）、あるいは祈願に対する靈妙な効驗、りやく＝利益（御利益）は神仏の力によって授かる利福、功德は善行の結果として与えられる神仏のめぐみ、と理解しておきたい。

真野は『宗教学辞典』を引用して、霊験は、①人間の側の請願・希求に心じて、②あるいは神仏側の自発的な働きによって示される、③霊妙不思議な超自然のあらわれの、④体験」と特徴づけている（真野「四国遍路霊験譚」）。

このような用語理解を参考にして、以下に、願掛け一祈願、参詣、遍路を通して見られる江戸時代の庶氏の願いとその神仏等の力を借りた実現のあり方を探っていきたい。願掛け、参詣（遠隔地参詣）、遍路では行動のレベルにおいて差異があり、区別して検討する。

2 願掛け一祈願（個人祈願）

先に引用した青山の表現では「奇跡は願いに応じて発現した」とあったが、これは我が国においても同様だと思われる。そこで江戸時代都市庶民の願掛けからその願いをくみ取ってみたい。願掛けは個人レベルと集団レベルのものがあるが、ここは前者に限定する。

幸いにもほぼ同時期の大坂と江戸の史料が残っている。大坂は『願掛重宝記』（文化13年—1816年刊、大阪府立中之島図書館蔵）（資料1）、江戸は『江戸神仏願掛重宝記』（文化11年刊、『郷土趣味』第八号～十号所収）（資料2）である。

資料1及び2によって庶民の「願い」を分類すると、病氣平癒（子供の病氣平癒も含む）、諸願成就（様々な願い、家業繁栄、家内円満を含む）（註1）、産育（子供を生み育てる）、除厄（災厄、災難を逃れる）と大別できる。大坂と江戸でそれぞれ集計すると、

	大坂	江戸
・病氣平癒（治病）	44 (61%)	19 (63%)
・除厄（除災）	8 (11%)	4 (13%)
・産育	9 (12%)	2 (6%)
・諸願成就	11 (15%)	5 (16%)
（合計）	72 (100%)	30 (100%)

となって、両都市とも病氣平癒が60%を超え圧倒的に多い。ついで諸願成就、産育、除厄となる。産育の願いが大坂と江戸ではその比率が大きく異なっている。大坂は子育てがむづかしかったのであろうか。逆に願いを叶える神仏の方を見ると、大坂が専門化（特化）が進んでいる。

次に願掛け行為のパターンを見ると、a（願掛け→成就）、b（願掛け→成就→お礼）、c（願掛け→〈精進・断ち〉→成就→お礼）といった三つのタイプがある。実現過程が複雑化すると同時ににお礼参りという行為が付属することが多くなっていったのであろう。また願掛けに奉納物を伴うケースもあったり、絵馬をお礼として納めるという点は興味をそそる。この願掛けの対象は身近な神仏や自然物・場所等であって、住居から日帰りで帰れる範囲であったろう。

3 参詣一遠隔地参詣

これに対して、遠隔地にある霊験あらたな神仏に参る場合を検討しよう。ここでは、金毘羅参詣を取り上げる。元々金毘羅神は海上交通の守護神として信仰されていた。その信仰内容を『象頭山金毘羅大権現霊験記』（明和6年—1769年、香川県歴史博物館蔵）（資料3）によってみる

ここには22件の霊験譚が載せられているが、その内訳は、除厄9、諸願成就7、除海難4、病氣平癒2である。意外な結果であるが、海難を逃れた話は4（18%）で、あとはその他の現世利益である諸願成就、除厄、病氣平癒である。金毘羅神が性格変化をおこしているようである。尚罰が登場するのも注目される。

江戸の中期以降金毘羅信仰は急速にかつ全国的に広がっていったが、それは海神から現世利益の神への神

格変化を伴っていたことは、守屋毅の研究に詳しい（『金毘羅信仰と金毘羅参詣をめぐる覚書』『金毘羅信仰』）。また安政2（1855）年5月に金毘羅に参詣した清河八郎は

この金毘羅は数十年この方天下に信仰しない者もなく、伊勢の大神宮同様に人々が諸国から参拝に集まり、その上船頭たちが大そう尊崇するから、船主たちの奉納する物がおびただしく、山の下から本殿までの間の左右の玉垣の美しさは、ほかに比べられる社寺がない。数十年前まではこれほど盛んなこともなかったのであるが、近頃おいおい繁盛するようになったことを考えると、神様にも時によりはやりすたりがあるのであろう。今この金毘羅と肩を並べている神仏は、伊勢を除いては浅草と善光寺であろう（『西遊草 清河八郎旅中記』）。

と、金毘羅が伊勢、浅草、善光寺と肩をならべる繁盛ぶりを示していたことを記録している。これらの神仏も金毘羅同様に現世利益の実現という点で大きな信仰を獲得していたものと思われる。

一方仏教史研究の側からは、江戸の後期には近世仏教の祈祷化が進み、「民衆の信仰が動いているのは、祈祷による現世利益のみ、といっても過言でない状況となった」という指摘がすでにあり、寺社参詣あるいは遠隔地参詣が盛んになる要因または背景と考えることができるであろう（圭室文雄「祈祷寺院の性格」『日本宗教の現世利益』）。

4 遍路（巡礼）

四国遍路ではどうか。遍路のご利益をまとめたものに真念の『四国遍礼功德記』（元禄3年—1690年刊）（伊予史談会編『四国遍路記集』所収）（資料4）がある。表題の「遍礼」はへんろと読み、「功德」は先に示した善行の結果として与えられる神仏のめぐみの意味と理解できる。さてこれを分類すると、合計24の靈験譚のうち、病氣平癒10（41%）、奇跡5（20%）、罰3（12%）、家業繁栄2（8%）、除厄2（8%）、冥加2（8%）となっており、すべて現世利益の実現である。奇跡や冥加、罰といった独特の範疇でしか分類できない部分がかなり比重を占めているが、これが弘法大師の霊力の強さを印象づける役割を果たしているであろう。また病氣平癒ではハンセン病患者の平癒事例を出しており、真念はハンセン病患者の救済を表明していたと考えられ、注目される。

お わ り に

「現世利益」の実現は、願掛け、参詣、遍路に共通しているものであった。江戸時代の庶民がもった様々な願いの宗教的な形をとった実現方式が、願掛け、参詣、遍路であったともいえるであろう。遠隔地参詣の対象となった霊地は、その霊地特有の宗教的柱（または功德）を持っていると同時に「現世利益の実現」というもう一つの柱をもっていたのではないだろうか。その結果として大きな信仰を獲得したといえるのではないか。

こうした遠隔地参詣や遍路のもつ現世利益の実現という側面を追っていくと、冒頭に述べたヨーロッパの巡礼の「奇跡」と非常に似たものが読み取れ、その類似性を強く感じさせるものがある。巡礼の比較研究の手がかりの一つがここにあると思われる。

（註1）「しょがんじょうじゅ」は「所願成就」が一般的な使い方であるが、本稿では、史料での使い方、「しょ」＝「諸」に従った。

（付言）本稿を準備する過程で、華園聴磨「日本における霊地と霊場—「まいり」の現象学の視点から」、今井國男「聖地と巡礼」を初めとする岩波講座『日本文学と仏教 第七巻霊地』所収の諸論文をも参照したが、その成果を盛り込むのは今後に果たしたい。

資料1 願掛重宝記（大坂）

願い	分類	対象	参詣所1	参詣所2	参詣所3	縁日	捧げもの・お礼・備考
家業繁栄・除厄難・除病苦	家業繁栄	北辰妙見菩薩	能勢野間村妙見司	久々知広済寺	千日自安寺等の妙見菩薩・縁日	15日、午の日	
四季毎の雲り掛け相模なし	家業繁栄	大塗の社	住吉4社の本願の南法泉の手中				商人職人
富貴・家業繁昌	家業繁栄	足少門	信貴山	長町大愛坊	→大坂寺社遊拝記	3日8日15日	鏡子を遣って奉納
婦女道いずのあち	技芸上達	紙子仏	西天王寺				四神の時代参を立てる。御礼＝松川が祀り
安産	産育	稲荷の社	近衛親北田から徳川幕府のうち				御礼を備える
安産（佐助の婦人）、除母	産育	天神の社	天下茶屋村南の出口				誕生石のそばの小石3つを拾って信心す、御礼＝拾った小石に添えて3つ石を納める
安産（佐助の婦人）、除母	産育	誕生石	住吉				遣い針二本を納める
信託をさける	産育	聖徳太子堂	西天王寺				太子堂の軒を乞い受ける
信託	産育	聖徳太子堂	西天王寺			24日	
子安（佐助の婦人）	産育	子安地蔵尊	天満東寺町龍徳寺				
乳がよく出る	産育	乳守の宮	堺				
乳汁をよく出る	産育	布衣稲荷石像	西天王寺西大門南手				
髪を梳し月代をさくらう	産育	お茶屋の地蔵尊	上町				お茶屋を飲まず、お茶にて月代をもむ
《祈願》	諸願成就	櫻	藤の野田村えびす社				総馬
開運除厄	諸願成就	北辰妙見大菩薩	天満東寺町西成正寺			15日、午の日	豊臣秀吉公の信じたまう
諸願・七招を生ず	諸願成就	大聖歡喜天	若菜屋山寺	山崎観音寺	南田法華寺・天下茶屋村正門寺・北辰妙見大菩薩・21か所→大坂寺社遊拝記		禁忌禁破事多し
諸願成就	諸願成就	清正大神祇	天満東寺町西成福寺			24日	近衛親北田、御礼＝額（蛇の目紋、神号、随主姓名）
諸願成就	諸願成就	古樹の殿・王任の同島居	梅田の西の野中				御願・吉四二品画図で著す
諸願成就	諸願成就	稲荷社・白世親大明神	天満天神社内				荷物に「五大力」の根札をつける
霊夢あらたか	諸願成就	妙見司	北野新やしき法音寺				水調の符という
除く凶事（回輪説海の荷物）	除厄	五大力菩薩尊像	住吉観音寺			二四日	
除火災、除盗難	除厄	玉造口本庄村観音寺	中之島久保町町子州字和島御成屋敷			三月一八日より二一日大坂平野町中崎前よりまや徳兵衛で捧ませあり	旅旅の人一三年間正月元朝の寛政新ち
除災難・開運をまらる	除厄	鎮守の社・稲荷神	中之島久保町町子州字和島御成屋敷			二月初半、二の午の日、三の午の日、	龍頭の問
除病難の患い	除厄	観世音	紀州龍越				旅の首途の時立願
除厄難	除厄	我流子の観音	住吉				
通中達者、除病中達難	除厄	石神の社	西天王寺			9日10日	
免海上風波難・火災、諸願成就あり	除厄	象頭山金比羅大觀現	中之島常安町武州松崎松崎御成屋敷	天満高世その他		18日	大坂高きめぐり第丸番札所
厄除け	除厄	観世音（厄除けの観世音）	天満東寺町西成東寺	奈良の南門堂と同時		四月八日	甘茶を手足に塗る
しもやけ	病氣平癒	源弘の甘茶	白髪町観音堂大福院				神馬の御料の白豆3粒食う
はきり	病氣平癒	神馬	住吉大明神				御礼＝土の壺
眼病の平癒	病氣平癒	八幡	北野目神八幡宮			二〇日、二一日	帳、お膳
五痔	病氣平癒	秋山白雲堂神の石碑	上福島明松寺				花を供ず
五痔	病氣平癒	地蔵尊	新清水				参詣、あかへの魚を断つ、御礼＝赤へを掛いた総馬
五痔	病氣平癒	広田の社	広田社				御礼＝総馬
五痔・祈願受納	病氣平癒	鳥居沙密明王	平野町御堂の社内宝珠寺			一五二三日二九日	

五符・神符・神札・帯より下	病氣平癒	子の権現	上福島光聖院元三大師堂内		十日、甲子の日	お膳
虫の噛み	病氣平癒	砂流大権現				御札＝絵馬
虫の噛み	病氣平癒	地蔵尊	幸橋南詰一丁目西、南入る、北向き地蔵堂			壁り著にて食せざるを誓う
虫の噛み	病氣平癒	戸尾大明神の社	平野町御堂の社内宝珠寺		一八日二三日二四日二九日	三年間袋を食ふまじと誓う、御札＝梨に年数を記し献する、梨の絵馬、何の絵馬でも奉納すべし
虫の噛み	病氣平癒	上人堂	千日葛所礼馬			御札＝絵馬
虫の噛み	病氣平癒	御堂大明神(借神)	四天王寺			御札＝絵馬
虫の噛み・諸病	病氣平癒	美徳如来	梅田葛所の西手			
腫れ物	病氣平癒	鎮守の稲荷様の社正一位 五牛大明	中之島常安町田辺屋橋の西阿波徳島侯御蔵屋敷			腫れ物の姿を描き模に貼り付ける、(御札) 絵馬
諸病平癒	病氣平癒	要島大明神	天満福川堀川成社		巳日	御札＝立懸一対、立懸絵馬
諸病平癒	病氣平癒	霊驗地蔵尊	道空町			御札＝絵馬、百度石あり
諸病平癒	病氣平癒	抹香の地蔵尊	北堀江四丁目五丁目間和光寺阿弥陀池			抹香を供せんと誓う
諸病平癒	病氣平癒	北山不動(國歌の不動)	天王寺寺町くちなは坂太平神寺			北山友松子母女の墓
小児のくさ、疳毒、	病氣平癒	鎮守の稲荷様の社正一位 五牛大明神	中之島常安町田辺屋橋の西阿波徳島侯御蔵屋敷			(幸ばもの) 土細工の牛、(御札) 土の牛・牛の絵馬
小児の驚風・諸病、痘疹、	病氣平癒	護国童子神王	玉造口本住村観音寺		八日一五日	陀羅尼又は護国童子神王の名を唱え五色の糸を結び礼拝をなす。
安産	病氣平癒	油かけ地蔵尊	安産寺町一丁目東北角			御願え＝御酒、赤菓子松竹梅又は赤花、護符小児に預かすべし
小児の諸病	病氣平癒	稲(農民の敬物品)	梅田の牛の蔵入り		五月五日	御札＝石仏の地蔵尊に油を塗る
小児退熱かるくする	病氣平癒	袋田彦大神	島之内三北八幡			御札＝土細工の鼠、鼠の絵馬
小児退熱かるくする	病氣平癒	袋田彦尊	平野町神明宮			御札＝土細工の鼠又は鼠の鼠
身内の痛み	病氣平癒	根(冠大明神)	千日葛所火屋の傍ら	上福島天神社		御札＝土細工の牛又は牛の絵馬
足の痺痛	病氣平癒	牛の宮	四天王寺		毎月一日	御札＝土細工の牛又は牛の絵馬
中風の瘰癧	病氣平癒	青蔵大明神	さなだ山福満社		一〇日	月参りすべし
頭痛平癒	病氣平癒	紙子仏	四天王寺			紙子を縫って奉納
頭痛平癒	病氣平癒	菊音の田楽	四天王寺九頭竜院現社前の店			
頭痛平癒	病氣平癒	國風王の石像	合法が辻			開帳王に赤巻をさせる、御札＝絵馬
難病・諸難成就	病氣平癒	美徳如来	常安親町玉江橋福満東角			御札＝絵馬、土器を穿いだもの
野狐つき	病氣平癒	神主権之頭	加島村福満社			
冷え一切、帯より下の病	病氣平癒	鎮大明神	天王寺町くちなは坂葛少北へ入る西隣			御札＝木製の鼠、鼠(絵) 馬
冷え一切の病平癒	病氣平癒	住吉大明神御前あらひ・前の海	住吉大明神		六月一三日	浜で浴す
労咳・醉狂人の酒	病氣平癒	かしく(本良妙庵信女) 墓の手向け水	北野新やしき法清寺			
痘疹軽くする	病氣平癒	土人形(一夜預け、その後痘疹の神として神棚に祀る)	土佐堀二丁目今井仁右衛門に預ける	今井家の近所に土人形を商う家あり		
痘疹軽くする	病氣平癒	鎮守の稲荷様の社・正一位 寛大明神	土佐堀白子町江州松江侯御蔵屋敷			奉納の竹の皮笠を掛けかえり、かざり毎朝拝む
痘疹軽くする	病氣平癒	妙正大明神	四天王寺			お守り＝妙見堂より出る
痘疹軽くする	病氣平癒	青面金剛童子	四天王寺			庚申癩急なく参詣、血の汚れを忌む(個人歴後七日過ぎて参詣すべし)
痘疹軽くする	病氣平癒	地蔵尊の絵馬「熊西八郎 為朝の面」	大坂町中辻々			乞請けて我が家の門口の上に釣り置く。済みてこの絵馬に添えて新絵馬(熊西八郎)を奉納
痘疹除け、痘疹軽くする	病氣平癒	氏神				毎年節分の夜(文政一文と鼠の数の豆を包む、年詣りの時本社の雨だれ落ちに埋める)
痘疹平癒	病氣平癒	九頭竜院現社	四天王寺		三日一三日二三日	参詣道にて七種の草を踏み集める、御札＝牛の絵馬、土の牛
痘疹	病氣平癒	御の宿神志持所	近衛町九郎右衛門町所成第一丁西長久保町			

資料2 江戸願掛重宝記

願	分類	対象	参詣所	縁日	捧げもの・お礼・備考
夫婦中むつまじき、夫・妻の良縁	家内円満	女夫石	本所石はより番場へ行く河岸の石工の家		
小児の月代剃りを機がるを止める	産育	流産の水	目黒不動		
小蛇を除く	産育	「北見村伊右衛門」札	武州多摩郡北見村高森伊右衛門		
諸願成就	諸願成就	どんぐり神	本所危井戸天満宮境内		爺と婆の本堂の内、爺へ、鬼のひかえし魂を爺の体にまとう、1日の間意心すべし、願書をしたためた祠の内へ打ち込む、礼は、大望は鳥居、小は給馬を納める
諸願成就	諸願成就	炎の平内石	本所の郷平内西詰高森境内	二四日願掛け人多し	地蔵を提でくり願を掛ける。礼は縄を解き花を供す
諸願成就	諸願成就	石の地蔵草	八丁目堀より本材木町六丁目にわたる松尾橋東詰め	庚申の日	石像の前に燈を供す
諸願成就	諸願成就	庚申守石堂	王子堀堤	七月一三日	初回地内などで求めた小鈴を納め、既に奉納のものを一本持ち帰り家内に掛けおき、翌年それを納め代わりを持ち帰る。
悪事災難を免れる、諸願成就(心願成就(家内良縁))	除厄	王子堀堤	八重洲河原大橋小政田堀やしき内熊井戸氏		
安全お守り(高い處から落ちて無事)	除厄	守札(御脚の守)	浅草寺町本法寺	午の日	九月二五日より切手を出し、一二月一日より札を出す。もり札を門戸・家内に貼る、縁に入れる、首に掛ける
盗難、道中除難盜賊を除く	除厄	熊谷稲荷大明神	浅草寺町本法寺		札を門戸に貼る、道中の時「分」の字を切り抜き香ます
厄災を除く・難産の解消	除厄	節分般若の札(般若堂)	浅草寺般若堂		一七日間稲穂、御礼口(燈カ)を供す
いば・はくろ	病氣平癒	いば地蔵	牛込菜土明神境内		一七日間稲穂して塔婆を供し礼拝
たんせき(痘瘡)平癒	病氣平癒	疾風	法恩寺(本所押上村)		願はどきには豆を煎って供える
たんせきのうれひ、小児百日ぜき・咳の除み	病氣平癒	石のばばさま	木挽町つきち稲葉候のやしき内		
眼病	病氣平癒	稲荷の祠(正一位茶臼稲荷大明神)	市谷八幡宮正面坂茶の木		七日間の稲穂断ち。御礼は穀一本奉納。送迎の場合は自宅にて断ち切る、平癒の夜参詣
脚氣	病氣平癒	大木戸と雪路の古株	芝牛野の大木戸		道に落ちていた雪路の葉を心に誓った数だけ拾いこれを供る願掛けする
寝から下の煩い(脚氣・脚氣・腰痛等)	病氣平癒	子の聖神	芝増上寺山内より赤羽根にいづるところ	八日	御礼、穀と供米を奉納
歯の痛み・口中のやまい	病氣平癒	三途川の老婆(木堂)	浅草寺東山		礼には稲枝を供す
痔	病氣平癒	待連雲神(さんやの痔の神)	山谷寺町・待連雲神		
疾風の煩い	病氣平癒	飛騨稲能大明神	両国橋の真ん中	卯の日	北の方へ向い差3本を川へ流す。平癒後再度差3本を流す、断ち物、いわし・ひしこ・ごまめ・たのみいわし、3年間
虫歯	病氣平癒	大根の根	福池のあおい坂の上		「白山熊現」と念じて願掛け、礼は稲の稲枝を供す
虫歯・口中のやまひ	病氣平癒	口中おさんのかた	西の久保かはらけ町善長寺	八月八日	本堂で稲枝を借り、稲むしをなでる、平癒後稲枝を奉納
頭痛・小児百日咳	病氣平癒	橋の欄干稲玉珠	四ヶ谷のさめがはし、麻布のこうがいばし		
頭痛平癒	病氣平癒	橋の欄干稲玉珠	京橋・北の川の真ん中		荒明で稲玉珠をくくる、平癒後昔竹の祠に茶を入れてこれに注ぐ
頭痛平癒・髪の手いれ、頭の煩い	病氣平癒	高尾稲荷	永代橋西詰		橋を同より借用、御礼に新しい稲を添える
病氣平癒	病氣平癒	張り御符の札	堀の内妙法寺相勝堂		札を借り病人の枕元へ張り置く、七日毎に上にする、二一日目で平癒、延病・長病は二一日おいて札を張り替える
痘瘡・はしかを軽くする	病氣平癒	仁王尊(右の方の一体)	金池山成草寺	八日	この仁王尊の殿をくぐらす。不断は稲穂、稲田には人を入れる
痘瘡・はしかを軽くする、百日咳	病氣平癒	龍のわたしの川木	龍のわたし・小堀町よりかやば町へわたる間		
痘瘡の子の治癒	病氣平癒	孫杓子	越前国福地・駒込坂廻手海蔵寺内		杓子を借りて子に湯浴みさす
楊梅瘡	病氣平癒	橋と川	浅草鳥越橋		「己が年を記し川へ流す」。礼は竹の間に水を入れて川へ流し茶を献ずる

21	同題三島村結屋小十郎不思議之事	結屋小十郎が老けた時、一〇月一日夜に入ってから参詣し、石橋の辺に山伏が立っていて、今夜の参詣は止めてここから帰れといった。明日は早朝に帰るので、今夜参詣したいと押し問答をしていると、持っている足灯がぱたりと落ち火が消えた。その中で方向が分からなくなくなり、身の毛もよだつくらい恐ろしくなり、何となく下向した。国元に加えて混乱となり、一兩年してやっと正気になり、七〇すぎまで堅固であった。(大権現が)参詣を留めたにもかかわらず、参詣を望んだために早く思いたしたが、お慈悲でまた本心に立ち返り、長命に過ごせた。驚く不思議なことであった。	陰叵(火災) 健康長者
19	信中山山崎矢戸村庄屋兵衛利生を夢事	例年庄屋与兵衛は、支配の村々の年貢を輸送に出してその代価を頂上に納めていた。ある年、領主水谷左京進の役人は、例年と違って年貢米をそのまま所蔵に入れ、封をしておくことを命じた。この年は大権現だったため与兵衛は役人にこの要求に大権現に貸し付けたことを頼願することを頼願したが、役人は江戸に帰ってかたことか否えなかった。与兵衛は官制に分け置かれた。城下から兵衛を召還する使いがやってきましたが、老母は命乞いに即日大権現に代参をたてた。与兵衛は自費をはかったが、死ぬことができず免死された。城下から兵衛を呼び治座した。春入国した領主は与兵衛を呼び出し集めかつ衣服を与え、村々へ分かった米は徴収しなかった。与兵衛の未還米も免除された。当時代参に出た者は、謝儀に着いた後、死ななければせぬ死ななければという大きな声を聞いたという。これは与兵衛が自殺をした時刻であった。	陰叵(火災) 加
8	苗田村之住人冥聖にて死す事	享保のはじめの頃、一〇月の芝居見物が多い時期、特に人気の高かった株本竜馬四郎次郎の芝居で、苗田村の者たちが無茶をして芝居場と争いになったが、山の神さえの者たちが駆けつけて双方を引き分け、星の芝居は無事すんだ。夜の芝居で役者が実屋に入っている時に、昼間の道徳を誦らそうと苗田村の者たち二十人ばかりが威嚇して押しかけてきた。まず看板を破り突き落とそうとして、手下の者に命じられた。石突で落とせと命じ、石突で看板をついたところ、物が物につかかって抜けなくなり、物を強引に引き抜こうとしたので、通にその後ろにいた頭取の脇の下を突き破って穿ててしまった。このため悲境の者たちは逃げ去った。この無法者が叫びかけると少しく間、本社の上から黒雲が飛んできた。それ以後、悪疫が流行した。その翌は葉屋を包んでいて、かの頭取が突き殺されたと山の方面へ飛び去った。四郎次郎は金鼠置信敬あつかうさるによって難を逃れたのは、大権現の權渡であつた。悪党たちは冥罰でたちまちに死んだのであった。	陰叵(火災) 詞
5	次太守公号節師公被捉捕給事	高松の次の太守(源節公)が江戸の龍の口屋敷におられるとき、市中に大火が起こり、舞屋敷に火がついて近習があわてて観衆を目黒の屋敷に移らせるために、賈道が御旗を出るとき、屋根の上でそれまで「白猿様の真人身帯をもつて」火を防いでいたが、賈の賈道が御旗を出た時、その姿が見えたという。その報告を受けた殿は神威の冥助として嘆息をいや増しに強められた。	陰叵(火災)
6	京都就御願敵能之時不思議之事	京極の願敵は大権現といふ説法大師を拜まて、「現当二世安楽」を祈らせていた。江戸愛宕下の屋敷は数度の大火にも延焼せず八十余年無事であったが、ある時の大火についてに焼けた。このとき他の屋敷から、老真人と黄衣の老僧が燃えさかる炎を打ち消してしばしば防いだ。その後、そうした光景が見えた。老僧は弘法大師、老真人は大権現だったという。	陰叵(火災)
12	黑紙多摩津肥尻火災を逃事	宝永の頃、多摩津の町で火災がおこり、町屋が多く焼亡した。その風下に岸尾院という密教の寺があったが、もう寺の近くまで火がきて火煙はさらけられないと思つたが、本尊の燃ゆるのが悲しく、大権現に祈願しようとお守りを竹の端に挟み、堂の軒端に指し付け至号を唱え一心不乱に祈ったところ、風が急に方向をかえて燃えきった方に吹き始め、窮地を免れた。住持は大喜びをした。これは大権現の權渡だと考え、早速に参詣し、いよいよ信仰を深めた。	陰叵(火災)
15	岡山山村村某申妻免役病癒事	元禄年中、山村村某の妻大病を患っていたが、その父が権現に真心をこめて祈禱を致すとて新嘗したところ、五月二十八日の晩に黒い羽に乘った八〇余の老翁(金鼠置神)が現れて明日より回復するのであらうと告げ、以後不為事を怠らせまいと命じた。翌日より起居がかかるくなり、日を迫って回復した。	病氣平癒
16	豊後の國熊本氏之孫民病癒事	享保一三年 豊後の國熊本藩士の大坂屋敷の株本権右衛門の孫延慶六歳が、ふと煩ひ、時々正気を失う症状であつた。大坂の名医にかかっても効果はなかつた。ところが金鼠置大権現は霊驗無双の神と認められているが、高松城の一宮参詣のもとに書簡に初穂をそえ依頼した。結果はお守りを株本氏へ送ったところ、一ヶ月後に株本氏よりお守りを頂き参詣したところの返事があつた。以後毎年株本氏は一〇月大会に二層の燈明を献じ信仰を怠ることはなかつた。	病氣平癒

資料4 四國遍礼功德記

時期	国	村等	人名	内容	奇跡	僧侶	分類
					右の外縁縁組々あり、今は尽くし難し、遍礼する人の中に種々の事あり、或は若くすくやかなる人眼に足すくみ、気相あしくなるなどあり、さんげ立願しれば、やがてよくなり、――		
					湖殿山、富士参のごとき、世の人百日の前行せざれば御定なりがたし。然に四国遍礼の行者は、前行許されて、彼山とて行なく附提するにとがめなし。四国遍礼の行者、事もえ、心身きままりて、神仏もうけ玉ふ事しられぬ。		
					遍礼人をあしくすれば賀か罰があたり、崇敬しける人は幸いあり、心ある人は遍礼をおろそかにせず、近年分別して善を修する人多し、接待をし留をかし等志成らず見えける。惣じて他の言をなすを見聞て隨喜の功徳本人に就ならずと聞きぬ。しかれば遍礼人を崇敬供養ある事其功徳いいがたし。		
	予州	宇和郡三間村		遍礼人宿を取ったとき、貧乏で動走すべきものなしとして山の票を取って勧めた。子供達が遍礼の面に来てはしがかった。	遍礼はこのようになものは子供のほしがるものだからと加持した。山中の票毎年四季に更り今にいたる。かの遍礼人は大師だと里人信心を深くした。		もの(冥加)
	予州	越智郡今治桑村	治右衛門	自らも遍礼をし、遍礼人に宿を貸す等、遍礼をいたわった。自宅の前の宿は何を揃えても育たなかった。	遍礼に与えようと平を揃えたところ事々しくさかえた。遍礼に自由に取らせた。遍礼人以外の人が食うと味がなくて食えなかった。		もの(冥加)
貞享年中	土佐	高田村	弥助	女房の織りかけの布を切って遍路の宿に施す	この布いかにほど切っても尽きる事なし	大師	家業繁栄
				①立ち寄った行脚の小僧に宿を貸し、屋根裏につるした炬を穂そうとしてその包みを開いたが既に炬はなくなっていた。僧はその気持ちの悪いに五段(五路?)でまじになったところ井戸ができ、汐がわき出た。②薄墨に里人は皆々四国遍礼に出かけ、さらに多くの汐が困ったが、一帯は炬を売って生業とし、田地の耕作をおろそかにするようになった。地主から税を掛けられたが、炬はでなくなつた。一章は一七日限り祈治立願し、里人は残らず四国遍礼をするに約束して大師を拜んだ。			家業繁栄

阿州	豊川	一人の女	昔大日照りの時、女が幼子に水を飲ませようといひ谷に水を深し、取み帰る途中であった。返礼に水を求められてそれを与えた。	延礼の節はこの岸に水を与えようと、五鈴までまじなうと、その場所が常流の川となった。	大師	奇蹟
阿波	恵井寺と徳山寺の間	橋の水、桐枝の水	この間の放牧水がなかった。夏の頃徳礼が水がなくて伏しているのと	一僧がやってきて桐枝でまじなうと清水がわきでた。その水で延礼は助かった。その桐枝をその川にさし、それが水となり、その里から水が湧き、長く往還の人を助けた。	大師	奇蹟
阿波	小野	さかせ川	とがりのある蛇目があって川を渡る人を悩ませた。	延礼が助けたら目とがりがなくなり、渡人を悩ませなくなった。	大師	奇蹟
延喜年中	江戸の近所の里		先年西國へ四回延礼して帰った若者が、所の年寄が病氣となり、その年寄が三石町で若者の延礼を買った。	その結果、年寄は病氣平癒し、若者は病人になった。		奇蹟
	予州	浮穴郡 右衛門三郎	西國にて言い伝えかくなれ、食飲無道にて延礼の宿を乞うたのに、叩かんとした其が終にあたり、鉢を八つに割った。八人の子が八日で餓死した。驚き悔やんで発心し、延礼二十一夜し阿州徳山寺の意で死んだ。	その時大師とあい、その願いを聞いて石にその名を書いて置かせた。専主河野氏の子に生まれ、あの祟った石が手の内にあって右衛門三郎であることがわかる。成長して河野の家を継ぎ徳山院を建て、神位を多く建て、かの祟った石を割め石寺と改めた。その家は数百年來えたという。この話は石寺縁起等にあり。		奇蹟
	土佐	洲崎今在家	近年火事があった。	唯一家が残った。夫も心も深く延礼と言えは宿を貸し馳走をしていた。	大師のお守り	除厄
	予州	宇和郡野井村 たなべ伊左衛門	寛文一〇年に延礼をした時、土州野井村大師堂で寝ている時夢に一僧現れて八日の内に家に災難がある、早く帰るべしと告げた。	札所札所に札を納めて夜を日にかけて走り語りして八日のうち家に帰った。実際に災難は起こったが、帰りがけで延礼を納めたので難を免れた。延礼を納め、延喜のはじめより七年間延礼の延礼人にほめられた。		除厄
	土州	室戸のあたり	くはず平	むかし大師がこれを求めたが、与えなかったためたまに食えない物になった。		罰
	土州	安喜郡神峰寺のふもと、とらの浜	漁師	延礼人はさああらんと行って通った。目はみな石となった。		罰
貞享元年	土州	安喜郡生首村		延礼はよしよしといつて通った。翌年よりこの里の焼は一つもならず、木も枯れて絶えた。一旦おちひより大師にいのり、延礼をはじめけるに、三日目のいふ事とどほりなく音便さわやかになり、舌のかかわれるように覚えた		罰
延喜9年	讃州	曾根原村宝泉寺	雲道	師より身をなげたと、黄衣の僧に助けられた。これから雲道は酔いからさめたとようになって心も正しく成った。	大師	病氣平癒
	土佐	安喜郡根浦	天さや七右衛門 娘	僧は娘が一石減になったら四回延礼すべし、夫れまでは毎年札を納めんと立願すればよい、そして大師に祈誓し忘れては成らないと言て出て行った。その月より病状常に癒なり年内に平癒した。		病氣平癒
貞享三年春	阿波	海部郡ひわさ 浦田渡村	又十郎夫婦の娘	娘は札所ではおとなしく他の娘では狂乱した。次第にうすれて三〇日ほど過ぎてからは、本心になり、延礼を成就して帰った。		病氣平癒
	泉州	伊予郡兵部村	瑞晴に染る人	一四日にもめぐりけるに影あり、それよりいつとなくよくなくなり、見る時は泣き泣いていた。		病氣平癒
	紀州	若岸という僧		その夜夢に高僧が現れて高僧命命といつてでた。明くる日よりすくすくと平癒した。		病氣平癒
	讃州	高松城下	なにかし	たちまち平癒した。若い身で不浄もあり近も遠も送いで、名代を立てようとしたが、うまくいかず、自身延礼に出た。廻っている間、月のさわりもなく身きよく足もすくすくやかに成就した。かならず若き女にても延礼中はけがれなしといふ、ひとつのふしきなり。		病氣平癒
貞享元年	讃州	妙にんという姥		たちまち稚小くなり、子を産んだ女の腹みだいにあった。延礼にて、つつがなく成就し、いままに平安に大師を信仰す		病氣平癒
	予州	宇和郡下村	こんや庄兵衛	突然病氣平癒し、大師の神位とて、夫れ延礼した。その後ますます延礼人を留め安撫した。		病氣平癒
貞享二年夏	紀州	阿州・徳山寺のふもと伊勢郡東家村	伊勢郡東家村中 島理右衛門ら九人と宿主助七	一行が徳山寺から若に帰ると女清は回復していた。また一行の打ち太師右衛門の札が土佐五台山より先二四、五ヶ所の札所に札五、七枚ずつ打ってあった。		病氣平癒 奇蹟